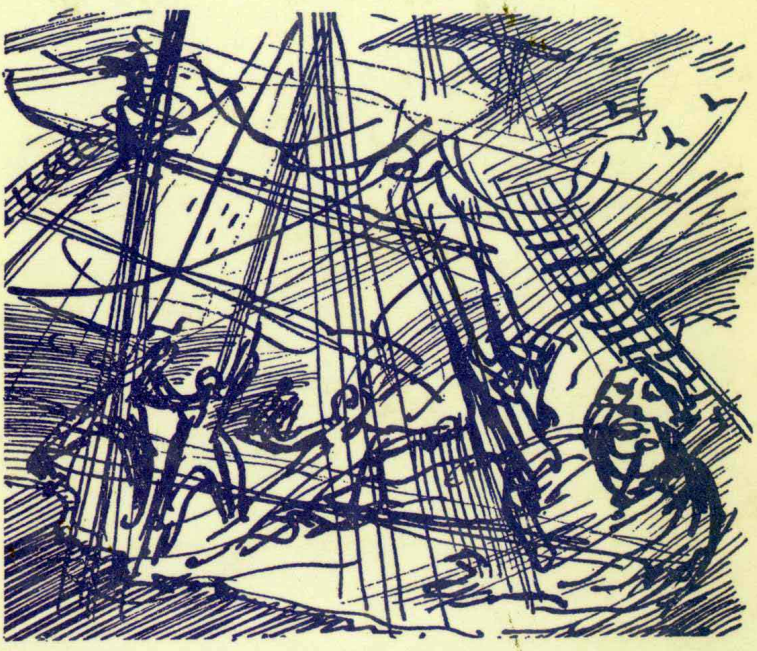
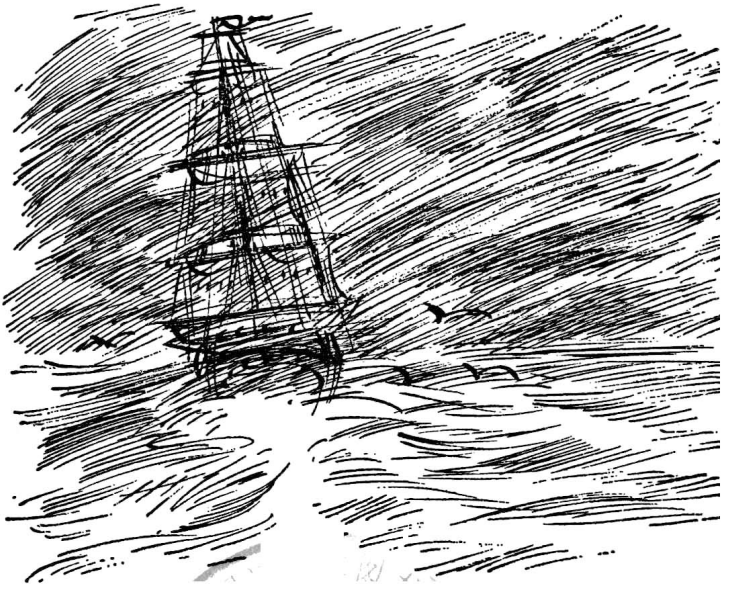


風のみなしご

エリック・C・ホガード作
犬飼和雄訳



冨山房

エリック・C・ホガード　作
ミルトン・ジョンソン　さし絵
風のみなしご

定価　1,100円

訳　者　犬飼和雄
発行人　坂本起一

1975年11月5日　第二刷

本文印刷　株式会社 文弘社
オフセット印刷　株式会社 集美堂
製本　富士製本株式会社

発行所　冨山房
東京都千代田区神田神保町1の3　郵便番号101
電話東京(03) 291-2171～7　振替東京54529

© by Kazuo Inugai, Printed in Japan, 1975
(落丁・乱丁はおとりかえいたします)

8097-897015-7313

目

次

一　ホアウインド号の船長……3
二　ホアウインド号の料理人……17
三　ホアウインド号の乗組員……33
四　出帆……48
五　航海……61
六　非番……74
七　マシューズ船長の演説……89
八　突風の襲来……102
九　乗組員の対立……115
十　おーい、陸だぞ！……125

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

十一　けんか……141
十二　火事だ！　火事だ！……150
十三　ホアウインド号のさいご……159
十四　暗い海……173
十五　平和な世界……183
十六　戦争への道……207
十七　戦争の音……219
十八　まっ赤なバラ……231
十九　別れ……243
さいごに……254
さし絵　ミルトン・ジョンソン

風のみなしご

一　ホアウインド号の船長

「イギリス船はがんじょうだ、できはいい……マストはりっぱだし、帆はじょうぶだ、ほかの国のやつとくらべたらだんちだ。だが、水夫ときたらろくでなしばかりだ！」男は鼻を鳴らしながらそういうと、ぼくをにらみつけた。その目は、ウィックス老裁判官が、罪人に絞首刑を宣告するときとそっくりだった。

ぼくは、自分のはだしの足を見おろした。ズボンの片方に、糸くずが一本たれさがっていた。糸のはしは、足の親指の上で白いうじ虫のようにまがりくねっていた。

「あいつらは人殺しだ！　一生牢屋でくらすようなやつらだ！　イギリスの水夫のおちつく先

は、そんなとこだ！」

「まあ……まあ、マシューズ船長、このまえの航海はついていなかったのです。イギリスの水夫はあらっぽいかもしれませんが、イギリスをささえているのですよ。」とポンドさんはいい、事務所のきたない窓からいらいらと外をながめた。ポンドさんは、モーガン海運会社の事務長だった。やせっぽちでこむずかしい顔をしていた。ぼくはポンドさんをよく知っていたが、顔に微笑をうかべることなどめったになかった。

「それなら、ポンドさん、おれはまったくついていなかったんだ！　このまえみたいな能なしの水夫は、フランスのセーブルにだって、メキシコのベラクルスにだっていやしねえ。」

「外国人だったのでしょう。」とポンドさんは、いまわしいことばでもはくようにいった。

「いいや、ポンドさん、みんな根っからのイギリス人ばかりだったんだ。あいつらはほとんどが、じょうぶなイギリス製のつなのはしに、首をぶらさげられるにきまっているぞ。もしそうならなかったら、おれのほうがたまげてしまうだろうな。」

「マシューズ船長、ここにいるジムは、りっぱな甲板ボーイになると思いますよ。この子の母親はたいへん働きものでした。わたしの妻のために洗濯をしていました。」

ロバートおじさんは、まえにでるようにとぼくに手まねきした。ぼくは、母が生きているとき、ポンドさんのことをロバートおじさんと呼んでいた。ポンドさんのおばさんとぼくの母がきょうだいだったからだ。ぼくは、いままでいた場所とふたりのおとなのいる場所のまん中まで進んだ。船長は、つくえのそばのいすに腰をおろし、おじはつくえの横に立っていた。

「こぞう、もっとこっちへこい。」船長のまるい顔は、まだ怒りのあまり赤くなっていた。ぼくは船長のそばまでいくと、船長の上着のいちばん下のボタンを見つめていた。「この子はだれのせがれだ?」

マシューズ船長は、顔をおじのほうへ向けた。ぼくはちらっと船長を見あげ、子どもならだれでもするように、この人は好きになれないぞ、とはっきりきめつけた。

「この子の父親は水夫でした。この子が生まれて六か月もたたないうちに、海でおぼれて死にました。ですから、この子は父親を見ていないのです。」

船長は、ぼくが悪いことをしたのをききでもしたようにぶつぶつ文句をいった。「ところで、この子はいくつだ?」

おじはすかさず答えた。「十三歳です。」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

いっしゅん、ぼくは、たったの十二歳だと白状してしまおうかとまよった。でも、おじがうそをついたということをばらしたら、おじになぐられるにきまっている。だから、ぼくはだまっていた。

「甲板ボーイよりは、えんとつの掃除人にでもしたほうがよさそうだな。」と船長はいった。それから、ぼくの腕をつかむと、ぼろ服の下のぼくの筋肉をしらべた。

「かりがあるからな……」と船長は首をふった。「あんたにはかりがあるからな、ポンドさん、この子は使ってやろう。」船長はいすから立ちあがると、おじと握手をした。それからもう一度ぼくをながめ、ぶっきらぼうに「今夜船に乗れ。」といい、事務所からでていった。

「船に乗れるなんて、」とおじは、船長がドアをしめると同時にいった。「ひどく運がいいんだぞ。マシューズ船長は、りっぱな船乗りだ。船はホアウインド号といって、ただの二本マストの帆船にすぎないが、りっぱなものだ。わしが世話をしてやったのだから、感謝しなければいかんぞ。」

ぼくの母が死んだのは、二か月まえのことだった。それからというもの、ぼくはポンド夫婦に感謝しどおしだった。たべさせてもらったからといっては頭をさげ、ぼろ服を着せてもらったからといっては頭をさげ、なぐられたからといっては頭をさげた。

「恩知らずは……」おじは天井を見あげた。天井は、むかしは白かったが、いまではランプのすすで黒くなっていた。「恩知らずは、罪のひとつだ。恩知らずだということは、牢屋への道しるべだぞ。」

ぼくはだまっていたが、それは、おじがぼくの返事を期待していないのがわかっていたからだ。ぼくは、ズボンからたれさがっている糸くずを、もう片方の足の指でひきむしろうとしていた。

「ジム、きいているのか?」

ぼくはうなずくと、ぼそぼそいった。「恩知らずだということはえーと……えーと……」

「牢屋への道しるべだ!」とおじが激しい声でくりかえしいった。そのときぎっと、ぼくも牢屋の中でくらすようになると、おじは本気で信じていたからだと思う。おじは、ぼくのところまでくると、両手でぼくの肩をつかんだ。「いいか、おまえのおふくろのことをわすれるなよ、ジム。」

ぼくはおじがきらいだったが、おじが母のことをいうと、きまって、きらいどころか憎しみをおぼえた。母が死んでからというもの、ぼくは夜ベットにはいると、かならず涙があふれた。

「はい、おじさん。」とぼくは小声で答えた。いまにも涙がこぼれそうだった。

「おまえに服を買ってやらなければならん。おまえのおかげで、かなりの金がいるんだぞ、ジム。」

「わかっています。」とぼくはつぶやいた。もう涙はきえていた。

「ウィリアム。」とおじは、事務所のドアのところに立ってどなった。

赤い髪をした背の高い青年が、ドアのところへやってきた。青年はそこに二、三秒立っていたが、そのあとでちょっと頭をさげた。

「この子をオールドフィールド通りにあるホーキンズ洋服店へつれていき、この子の服を買ってやってくれ。だがいいか、ホーキンズじいさんに、作業服でいいとつたえてくれよ。値段は二ポンド①までだ。」

おじは首をまわすと、つくえの上の書類を見おろした。ぼくはおじに「ありがとう。」というべきかどうなのかわからなかった。どうしようかとつっ立っていると、赤い髪の青年がぼくに声をかけた。

「さあいこう、坊や。」

ぼくはドアのほうへあるきだした。アーチ型をした入口までいくと、おじがからせきをした。

ふりかえると、おじが書類から顔をあげてぼくを見つめていた。
「ありがとう。」とぼくはぼそぼそといった。おじは、ぼくのことばをきくと顔をしかめた。
「おまえはひどく運がいいんだぞ。」
ぼくはうなずいたが、ひどく運がいいというのは、船に乗れることなのか、それとも、ホーキンズ洋服店で新しい服を買ってもらえることなのかはわからなかった。「わしはマシューズ船長に話して、おまえの給料から二ポンドさしひいておくぞ。」
ぼくはもう一度頭をさげたが、どうやら不満そうな顔をしていたにちがいない。おじはさらにことばをつづけた。「借金をしているということは、首のまわりに石うすをぶらさげているようなもんだ。そんなことをしていると、利子の海にひきずりこまれてしまうぞ。」
「わかっています、おじさん。」とぼくは答えた。
「今夜、夕方のお茶のあとで、わしが自分で、おまえを船へつれていってやる。」
おじの事務所をでると、赤い髪の青年は、ならんであるくな、うしろからついてくるんだ、といった。
オールドフィールド通りは、港の近くだった。おじの家は、グランドビー丘のふもとにあった

が、そこからあまりはなれていなかった。ホーキンズさんの店は、古い家の一階だった。店にはタールや船具のにおいがただよっていた。「ホーキンズじいさん」はいなくて、でてきたのは「若だんな」のホーキンズさんだったが、それでも、ぼくのおじより年をとっているように見えた。

赤毛の青年は、店へつくまえに自分のことをクラークさんと呼べといったが、ホーキンズ若だんなにおじのことばをつたえた。ホーキンズさんは、それではどうしようもないというように両手をあげた。「ポンドさんは、二ポンドで、四十シリングで、船乗りの支度をととのえろとおっしゃるんですか！」

クラークさんは肩をすくめた。

「どうしてブランドン丘のレズリー店へいかれないのです？　どうしていわれたままにおとなしく当店へこられたのです？　当店では、三ポンド以下ではできませんよ。」

ぼくは店をでようとしたが、クラークさんは、ポケットからつまようじをとりだすと歯のあいだにくわえ、もぐもぐといった。「この子の作業服でいいのですよ。」

「作業服でいいですって。もしこの子が、女王さまに食事にでもまねかれたらどうするんです？」

クラークさんは、口からつまようじをとると、ホーキンズさんを長いあいだ見つめていたが、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com